

2025年7月4日(金)～8月17日(日)

近代日本画のトップランナー 竹内栖鳳

場所／愛知県美術館 時間／10時～18時※金曜日120時入場は開館の30分前まで

休館日／毎週月曜日(ただし7月21日・8月11日・祝)は開館、7月22日(火)、8月12日(火)

料金／一般1,800円(1,600円)、高校・大学生1,200円(1,000円)、中学生以下無料

※(内)は通常前売券および20名以上の団体料金です。※右記料金で本展会期中に限りコレクション展もご覧いただけます。

※会期中一部展示替えをします。前期7月4日(金)～27日(日)、後期7月29日(火)～8月17日(日)

近代日本画の トップランナー



竹内栖鳳

TAKEUCHI SEIHO

近代日本画のトップランナー 竹内栖鳳

愛知県芸術劇場ダンスアーティスト就任のお知らせ

絵がひらく、生命力。浅井裕介

劇場と音楽 音楽いっばいの劇場都市を夢みて



竹内栖鳳《アタ立に》(部分)1909年 高島屋史料館(通期展示)

時代を進めた挑戦者

「西の栖鳳・東の大観」——近代京都画壇の筆頭格として東京の横山大観と並び称された竹内栖鳳は、元治元年(1864年)、幕末の京都に生まれました。画家たちが時代に即した新しい絵画を模索していた明治初期、円山応挙や呉春の流れをくむ円山・四条派から出発した栖鳳もまた、伝統の伝承だけにとどまらない新しい日本画を描こうと試行錯誤しました。従来の日本絵画の枠組みにおさまらない栖鳳の挑戦は、ときに批判の対象となりました。しかし栖鳳は絶え間ない修練に裏打ちされた抜群の筆技を下地とし、次々と新機軸を打ち出して、伝統の継承と

革新の双方を体現していったのです。また、上村松園や土田麦僊をはじめ多くの優秀な次世代を育てました。

明治・大正・昭和を駆け抜け、創作者として先頭を進み、教育者として後進の範となった「近代日本画のトップランナー」竹内栖鳳。本展では、《絵になる最初》(重要文化財 京都市美術館)などの代表作をはじめとする初期から晩年までの作品や資料を通して、栖鳳の画業を振り返るとともに、その表現世界の多様さをご紹介します。

愛知県美術館 学芸員 中野悠

スタッフのオススメ関連本! **ART LIBRARY**

竹内栖鳳

竹内栖鳳／画、平野重光／責任編集
光村推古書院、2013.8

明治から昭和にかけて活躍した日本画家・竹内栖鳳の主要作品と、その生涯を紹介した書籍。年代ごとに121点の作品をカラー図版で掲載。各作品の解説の他、栖鳳の落款や多種多様な印譜も収録。

中野学芸員

右《小春》
1927年 海の見える杜美術館(後期展示)

左《絵になる最初》重要文化財
1913年 京都市美術館(7/4～7/21展示)



愛知県芸術劇場

愛知県芸術劇場ダンスアーティスト 就任のお知らせ

今年4月にダンスを専門とする劇場専属のアーティスト「愛知県芸術劇場ダンスアーティスト」4組が就任しました。これまで当劇場では、2024年度から芸術監督に就任した唐津絵理とともに、30年以上にわたって、ダンス事業を行ってきました。重ねてきた取り組みをさらに発展させるために、多様な世代、ジャンルのダンスアーティストたちが当劇場を中心にした地域

での活動や芸術性の高い作品の創作・公演活動を行い、世界に発信していきます。

この発信は、「Constellation(コンステレーション)～世界をつなげる愛知県芸術劇場ダンスプロジェクト～」の一環です。日本語で"星座"を意味する"Constellation"。この言葉が示すとおり、各分野で輝く才能豊かなダンサー・振付家が、星座のように集い、お互いに連携し合いながら、当劇場を拠点に創作・発表・交流を行っていきます。観客、劇場、アーティストがつながることで、当劇場が日本におけるダンス作品のハブ劇場となって、日本と海外をつなげていくことを目指しています。



DANCE ARTIST

「愛知県芸術劇場ダンスアーティストとの交流を通じて、人々が出会い、響き合う場を育てていきたい」と唐津芸術監督。

愛知県芸術劇場唐津芸術監督と愛知県芸術劇場ダンスアーティスト

島地保武	振付家ダンサー	酒井はな	ダンサー	唐津絵理	愛知県芸術劇場芸術監督	三東瑠璃	振付家ダンサー	三岡田玲奈	振付家ダンサー	黒田勇	振付家ダンサー
------	---------	------	------	------	-------------	------	---------	-------	---------	-----	---------

写真左から→

愛知県芸術劇場ダンスアーティストが出演するイベントスケジュール

6/21(土) 8/15(金) 9/19(金)～21(日) 10/30(木)～11/2(日)

※詳細は今後、劇場WEBサイトなどでお知らせします。

就任のメッセージは
WEBページで!



劇場

鑑賞note



心を揺さぶり、思考が巡る、その場でしか味わうことのできないもの。

丁寧な言葉で残されたレビューを読み深めて楽しみたい。

美術館

演劇と音楽の新たな出会い

舞台前面には、譜面台と椅子、チェレスタを含むいくつかの楽器が置かれている。舞台後方の下手側には、ソファやテーブルといったリビングルームの家具類がある。そこにまず6名の俳優たちが、次に音楽家たちが登場してくる。アンサンブル・ノマドのヴァイオリン2、ヴィオラ1、チェロ1、ファゴット／コントラファゴット、クラリネット／バスクラリネット、チェレスタからなる7名の室内アンサンブルである。

背後でその上演が開始される岡田利規作の劇物語では、バックグラウンド音楽というより、物語の進行とつかず離れず演奏される藤倉大作曲の音楽とともに、家父長的な〈男主人〉に支配された女性たちの〈家族〉が、解き放たれることになる。それどころか、得体の知れない〈気配〉(俳優が演じる)によって、舞台空間そのものも浸食され、解体され流動化する。その過程で女性たちは、ときとして音楽家たちの間をぬって舞台前まで出てくる。

新しい音楽劇を目指すとする作家ふたりのコラボレーションの結実たる本作は、ウィーン芸術週間の委嘱で制作され(愛知県芸術劇場も共同製作に参加)、2023年5月当地で初演された。

俳優は語るが歌わない、音楽家は引き立て役ではなく舞台前面にいて、その身体的存在を顕示する。ただし、こうした音楽劇としての明らかなたちの〈新しさ〉を作家たちが主張しているのではない。俳優の語る音声とそのぎくしゃくした独特の身ぶりや音楽、いや音楽というより「音響」といったほうがよいような、ざわめきたゆたう響きとの絡みあいすべてである。分節言語(＝語られる台詞)／身ぶり／音響である。

俳優たちは台詞を語りながら、その意味を必ずしも補完しないぎくしゃくした身ぶりを上演しながら、また、演奏家たちは楽譜に書き込まれたパッセージを演奏しながら、それぞれが、つまりは俳優と演奏家のひとりひとりが、互いの呼吸をはかりつつ、上演時間の瞬間瞬間の〈いま、ここ〉で、物語的意味と身体的・聴覚的感覚を敏感に生起させていく。あるいは、偶発的に生起させてしまう。本作はこうして、前例のない演劇と音楽のスリリングな出会いの体験を観客に与えるのである。

内野 儀さん Tadashi Uchino

学習院女子大学教授。専門は表象文化論。著書に『メロドラマの逆襲』、『メロドラマからパフォーマンスへ』、『Crucible Bodies』『『J演劇』の場所』等。



© HATORI Naoshi

愛知県芸術劇場共同製作 チェルフィチュ×藤倉大 with アンサンブル・ノマド『リビングルームのメタモルフォーシス』

2025年3月1日(土)
場所／アマノ芸術創造センター名古屋(名古屋市芸術創造センター)

お知らせ Letter

2025年度の劇場主催のオルガンコンサートを 愛知県芸術劇場オルガニストが紹介

約2年半ぶりの「オルガン・レクチャーコンサート」を8月27日(水)に開催します。公演に向けて、ただ今“とっておきの”プログラムを準備中です！私が4年間の留学時代を過ごしたオーストリアのウィーンをテーマに、音楽の都の香りをお届けします。そして10月にオルガンの魅力を約1時間でお届けする「オルガン・アワー」、12月に「クリスマスはオルガンだ!」と、恒例のシリーズが続きます。みなさまと劇場でお会いできることを心待ちにしています。



愛知県芸術劇場オルガニスト
都築由理江

もっと知りたいアート専門の図書館
ART LIBRARY
(愛知芸術文化センター1F)

開架の奥の棚には、黄色い表紙でお馴染みのミニチュアスコアをはじめ、さまざまな楽譜が並んでいます。アートライブラリーでは、楽譜を約1万6,000点所蔵していますが、そのほとんどは貸し出しが可能です。



デザイン／神谷直広、高木若菜(株式会社Rand)
編集／村瀬実希(MAISONETTE Inc.)、ReIna
印刷／長苗印刷

© 愛知県芸術劇場2025 ※本誌記事・写真・レイアウトの転載を禁じます。 ※本誌に掲載している価格は、原則的に消費税込みの価格です。
※掲載内容は2025年5月20日(火)現在のものです。展覧会・公演の内容を変更、または開催を中止する場合があります。

2025年6月1日号 Vol.124 発行・お問合せ／愛知県芸術劇場(公益財団法人 愛知文化振興事業団) ☎052-955-5506 e-mail／mkt@aaf.or.jp(企画制作部)



今年は6月15日(日)に開催！ 第29回アートフィルム・フェスティバル

上映予定はこちら！



「アートフィルム・フェスティバル」は、独自の視点からプログラムを構成する特集上映会です。今回の特集は「映像制作集団・空族の流儀」。空族の富田克也監督作品で、愛知芸術文化センター・愛知県美術館オリジナル映像作品最新第33作として完成した『潜行一千里 ILHA FORMOSA』(2025年)の初公開に合わせて、空族作品だけでプログラムを構成！ぜひご期待ください。

© 愛知県芸術劇場2025 ※本誌記事・写真・レイアウトの転載を禁じます。 ※本誌に掲載している価格は、原則的に消費税込みの価格です。
※掲載内容は2025年5月20日(火)現在のものです。展覧会・公演の内容を変更、または開催を中止する場合があります。

2025年6月1日号 Vol.124 発行・お問合せ／愛知県芸術劇場(公益財団法人 愛知文化振興事業団) ☎052-955-5506 e-mail／mkt@aaf.or.jp(企画制作部)

AACのWEBサイト・SNS・
音声メディアでは
芸術を気軽に楽しめる
コンテンツを配信！

／こころのあや／
AACタイム
by 愛知芸術文化センター



WEBサイトを
チェック
aactime.aichi.jp

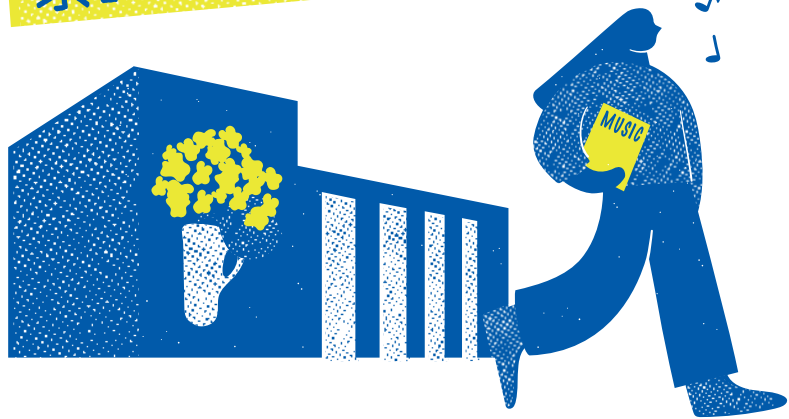


インスタを
フォロー
@aichigeibunaaactime



ポッドキャストを
きく
愛知芸術文化センターの
アートがもっと好きになるラジオ

劇場と音楽



音楽いっぱい劇場都市を夢みて

クラシック音楽ホールから
多目的ホールへ、そして街へ

振り返ってみると、キャリアの大半を「劇場と音楽」で過ごしてきました。スタートは大阪のクラシック音楽専用のいずみホール（現 住友生命いずみホール）の開館準備室への入社です。音楽業界の1年生として、高揚感溢れる現場で試行錯誤したのも懐かしい思い出となりました。同ホールに在籍した31年間のなかで、最も心に残っているのは、音楽ディレクターをつとめていた音楽学者の故・磯山雅先生の実践です。磯山先生は、学術知識を公演アイデアに見事な転化し、演奏家の選定にこだわり、オリジナル企画を次々と考案して、熱心な顧客を育成しました。ホールの優れた音響も活かされ、演奏家と音楽ファンに愛されるコンサート史が刻まれました。劇場と音楽のゆるぎない共存の場で仕事に打ちこめた

のは、なんて幸運だったのでしょうか。このときの経験は「劇場と音楽」を考える礎となっています。

2021年7月（公財）神戸市民文化振興財団へ移った筆者は、神戸文化ホールの専属団体である神戸市室内管弦楽団と神戸市混声合唱団運営の仕事に就きました。まず、直面したのが劇場と音楽の組み合わせの問題です。23年に築50年を迎えた神戸文化ホールは、大（2,043席）と中（904席）のふたつの多目的ホールを備えています。それまで面団が本拠としてきた中ホールは残響時間が短めでした。2021年度からは楽団音楽監督に就任した指揮者・鈴木秀美はそれに悩み、より残響が豊かな大ホールに移ることを提案しました。しかし、楽団のサイズや集客力を考えると、常識外とも言えます。悩んだ末、22年7月から思い切った面団と定期演奏会場を大ホールに移しました。演奏効果は音楽家にとっては死活問題ですから、格段に厳しくなった集客対策に迫られたが、せっかく大ホールに引っ越したのなら、その空間を活かした企画もやってみたい、と考えるようになりました。浮かびあがってきた企画がオペラです。神戸市混声合唱団は、関西を中心にオペラ歌手として活躍するソリストを輩出し、擁するプロ声楽家集団であり、音楽監督の佐藤正浩は新国立劇場オペラ研修所の所長という専門家です。これを活用しない手はない。折しも神戸文化ホールの開館50周年事業が吟味されていたので、両団によるオペラ制作を提案しました。プロの楽団と合唱団を有している神戸文化ホールは、専属演奏家を抱える欧州の歌劇場に似ています。それをヒントにしたうえ、新たなファン作りにもらんでいました。幸い案は採用され、実現したのが佐藤正浩指揮のヴェルディ作曲オペラ「ファルスタッフ」の上演でした（24年12月）。チケットは完売。初めてオペラを観たというお客様もすし詰めとなり、鳴りやまぬ拍手を聞きながら、劇場と音楽が一体化したときの陶酔感を味わいました。

やはり劇場と音楽のマッチングは重要です。これまた折しも、25年8・9月に神戸市主催で開催される「第11回神戸国際フルートコンクール」に連動した新

しい音楽祭の企画が持ち上がりました。それは「KOBEO国際音楽祭」と名付けられ、同年7月12日（土）から9月14日（日）にかけて、神戸市内の文化財や教会などでのコンサート、ストリートピアノでの演奏、500人規模のフルートアンサンブルなどのわくわくするようなイベント企画が市役所で練られていました。当方からも案を出すことになり、市内のホールのそれぞれに適した一流音楽家のコンサートのリレー公演を考えてみました。4館に呼びかけたところ、すべてが共催協力に手を挙げてくれたのです。

そこでフルートまたは神戸ゆかりの演奏家」をテーマにスペシャル企画を6本考案。神戸文化ホールで2企画、西神中央ホール、神戸新聞松方ホール、神戸朝日ホール、神戸酒心館ホールで1企画ずつ開催することになりました。メイン会場では海外のトップスターを迎えたオーケストラ公演、住宅地のお洒落なホールでは平日のお昼のトーク付き公演、酒蔵を利用したスペースには古楽器奏者やさまざまなホールなどで開催される大型事業となったのです。「劇場と音楽」が面団で広がりました。思えば筆者の「劇場と音楽」の変遷は、劇場の芸術的価値の追求を出発点に、社会的価値、そして経済的価値の再認識と活用へと、ここ30年の日本の劇場史の流れの縮図なのかもしれません。

というわけでこの夏、俯瞰すると神戸の劇場都市になっているかのようです。これは長年、劇場と音楽の可能性にこだわってきた筆者としては、ひとつの夢の到達点です。それは個性がハイモノーするオーケストラのような劇場都市でしょう。演奏の場では、劇場は重要な「楽器」でもあるわけですから。

ART LIBRARY

スタッフのオススメ関連本！



新 クラシック・コンサート制作の基礎知識
一般社団法人 日本クラシック音楽事業協会／企画制作
ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス
2025.5

クラシック・コンサートの企画・制作に必要な基礎的かつ実践的な知識や考え方、事例を学ぶことができる参考書。プロデューサーやホールの運営者など、制作に関わる人々が多角的なアプローチで執筆。全4部16章の充実した構成。

愛知芸術文化センター管理課 アートライブラリー担当 三上昂良



森岡 めぐみ

(公財)神戸市民文化振興財団音楽事業部長

楽団、合唱団、国際コンクール、音楽祭を統括。1989年から2021年までクラシック音楽ホールのいずみホールで広報、編集、資金調達等幅広く従事。大学や文化団体の研修会、劇場等で講師を務める。日本音楽芸術マネジメント学会理事。

MORE MUSIC

navigator's
COLUMN

国際芸術祭「あいち2025」のキュレーターやスタッフがナビゲート。
アートの多様性を「あいち」から発信します。

こんにちは。パフォーミングアーツ部門キュレーターの中村茜です。今回の舞台芸術プログラムでは、全9作品が国際芸術祭「あいち」に初参加のアーティストによるもの。そして中東、アフリカ、オセアニア、アジアから招く海外勢の多くが初来日です。フル・アル・カシミ芸術監督とともにつくったプログラムは、これまで巡り会うことのなかったダイナミズムや表現スタイル、文化や歴史性に触れられる貴重な機会になるはずです。世界中から注目の作品が集まるこの芸術祭。刺激と好奇心を満たす秋のプログラムに、ぜひお越しください！

国際芸術祭「あいち2025」キュレーター(パフォーミングアーツ)
中村茜(パフォーミングアーツ・プロデューサー)



© Takuya Matsumi

2025年9月13日(土)～11月30日(日)[79日間]

国際芸術祭「あいち2025」

芸術監督／フル・アル・カシミ

テーマ／灰と薔薇のあいまに
会場／愛知芸術文化センター、愛知県陶磁美術館、
瀬戸市のまちなか



INTERVIEW

絵がひらく、
生命力。

聞き手／愛知県美術館 主任学芸員 石崎尚
撮影／浅野杏子

絵を描くことの喜びと、
この星に生きるものへの敬意



Yusuke Arai

浅井裕介

1981年東京都生まれ。99年神奈川県立上矢部高等学校美術陶芸コース卒業。滞在先で採取した土と水で描く「泥絵」や、マスキングテープに耐水性マーカーで植物を描く「マスキングプラント」など、身近な素材を用い、あらゆる場所に奔放に絵を描き続ける。国内外の展覧会や芸術祭に多数参加。個人の制作にとどまらず、友人やボランティアなど第三者との共同作業を交えながら、10mをゆうに超える巨大な壁画を制作し注目を集めている。2019年横浜文化賞 文化・芸術奨励賞を受賞。

石 子どもといえば、浅井さんの画風は童心を感じさせますね。無限に伸びる木の葉、枝、生き物があふれているのはご自身が好きなものだからでしょうか。それとも、楽しげな絵を意識されているのでしょうか。

浅 「難しくならないようにしよう」というのはかなり意識しています。僕が絵を描き始めた目的は、「人が描くこと」という行為そのものであって、完成させることや画面を限定することは不要なんです。植物って、花が咲いたから完成ではなく、環境のなかで少しずつ成長したりしなかったり。そのあり方は、10代の頃から僕にとって大切なものでした。それの特性を活かしながら、自分のやりたいことを続けていくことは、人と一緒に絵を描くことにも通じるのかもしれない。遠方への旅行でも植物園を訪れ、「その土地で作られるべきお手本」として植物を見ています。石 動物もよく登場しますが、浅井さんにとって動物はどのような存在ですか。

浅 ある時期までは、植物が化けて動物のカタチになっているような、有機的なイメージでした。2019年に鹿の血で描いた《野生の星》あたりから、動物との向き合い方が変わってきましたね。僕の作品って、無邪気に見えると思うんですが、植物本来の力には野蠻性や力強いものが含まれているはずですよ。その

表現の到達点を求めて、環境に順応する植物的な思考から、自分に合う環境へ移動していく動物的な思考を作品に取り入れた、と考えているようになりました。石巻、石巻、宮城で猟師さんとお会えたことも、大きな転機でした。猟師として生きる人たちは自分なりの哲学があつて、血を分けてくれた小野寺さんは、すごく面白い方でした。血はいつか使いたいと思っていた身近な素材の一つです。ものづくりに喜びを伴うことが健全だと考えているので、血を使うときも、呪術的な雰囲気や死生観が出過ぎないように注意しました。土もどこにもあるからこそ、丁寧に最後まで使ってあげたいという気持ちがあります。でも血はその100倍強い。一滴も無駄にできない感覚でした。



《野生の星》2019年 愛知県美術館蔵



《その島にはまだ言葉がありませんでした》(部分)2020年 愛知県美術館蔵

変化する作品の数だけ、
思考と感覚がめぐり出す

石 《野生の星》は鹿の血、その島にはまだ言葉がありませんでした」は土、《組み合わせの魔法》は鹿の血から作ったプルシアンブルー。異なる画材で同じ絵柄を描き続ける意味は何？

浅 それは僕自身も考えている途中で、すが、追体験している感じです。あのとき自分が何を感じていたのか、鹿を獲るところから始まり、制作時は体力も使いますし、血のにおいも強い。元々の姿というか、森で暮らしていた鹿の視点や気持ちまで感じながら、素材と一緒に絵を描いていく感覚があります。そういう意味では既成の絵の具は自分に不向きと感じることも時折あります。使い慣れた土で同じ絵を描いてみたら、画面がさらに外へ広がってのびのびと楽しく描けました。普段の僕は即興が多く、同じ構図の絵を描くのは珍しいのですが、いまだに作業的にならず、鮮度を保って制作できます。おそらくですが、最初が鹿の血でなければこうはなかったと思います。それだけ「血で描く」という行為に



《組み合わせの魔法》(部分)2024年

は何かがあるのでしょうか。僕にとって絵を描くことは、自分が知らない何かを見つけない作業。その何かは言葉にできなくても、描き終わった後に見る世界がより鮮明に見えたり、多かれ少なかれ感じる「こと」があれば十分です。当時は同じ構図で絵を描くことを実現できただけで相当得るものがありました。

石 入れ替え可能な絵も、浅井さんにとって大事なんでしょうか。

浅 そうですね。最近は描き終わっておしまいでなく、展示パターンを無限に入れ替えられる作品をよく作っています。自分は生命力みたいなものを表現していて、それは常に変化し続けるもの。つまり考え続ける必要があることに生まれるので、わかりやすく面倒臭いです(笑)。でも、どうせ変わるなら、少しでもいい方向に変えていくことが大事なかなと思っています。その面倒臭さを一緒に面白がってもらえたらいいなって。美術館やギャラリーでは変化しない作品が望まれるわけですが、変化はある意味で僕の強み、生きている間にとこまで確立できるか取り組んでいきたいです。コロナ禍を機に陶芸を再開したのですが、制約のなかで確かなものを感じます。陶芸と絵画のあいだには、不自由さと自由さのバランスがあつて、普段絵を描いている作家でもその間を行き来したくなっている作家は、僕を含めて多いのではないかと。そうすることで、次の作品への勢いがつくんですね。大きな立体作品づくりもこれからの挑戦です。



取材は川崎市岡本太郎美術館の展覧会会場にて(既に終了)。愛知県美術館のコレクション《野生の星》(2019年)と同じ絵柄の《組み合わせの魔法》(2024年)を新作として発表した。